幼兒の修身教育に就ての基本的考え方

倉橋惣三

此頃修身教育の必要に就て種々の論議が行われている。人間教育として、その必要はいうまでもない。

しかし、その方法に就ては、被教育者の心理的発達によつて、必ずしも同一ではない。

それを誤まると、教育的効果を達しないし、有害ということはないが、正しきを得ないことにもなる。

教育のすべてに亙つて、この点は、周到正確に考えられなければならぬが、単純なる知的教科でない修身教育において特にそうである。

教育目的として、これほど重要であり、その重要性が万人に認められているに拘わらず、小学校の新教育において、修身科が廃止せられたのも、方法の考察の上からである。

その小学校の修身科復活論と共に、幼児教育においても、再びその修身教育が論議せられてくる。『修身科廃止』に対する一つの反動であると思われるが、教育目的上の熱意が強ければ強いほど、方法は精密に考慮せられなくてはならぬ。——その詳論は他の機会に譲るとして、——まだ、これまでも屢々説いたところであるし、こゝには、その考え方の最も基本である要点に就て、誤りなきを期したい。

修身科は道徳に関する科目である。しかして、道徳は生活心理的発達は、道徳感情、道徳観念、道徳概念の三つの段階を辿る。従つて、その教育も、この段階に応じるべきものである。勿論この三段階は、発達の過程において、決してさい然たる区劃を呈するものでなく、また、過程として、一々の充実が終りを告げてから、次の段階に移るというものでもない。道徳概念の発達によつて、道徳観念が明確になり、道徳観念の発達の中に道徳感情の発達の成熟を見るということもある。心理学的には、感情、観念、概念と分つけれども、道徳は生活であり、所詮生活の渾然性においてのみ、道徳があ

るのであるから、道徳感情、道徳観念、道徳概念のそれ〴〵が道徳生活の渾然の要素ではあるけれども、それらの一つ〳〵は、道徳ではないのである。

しかも、すべての生活の発達が実行（具体生活）に初発するごとく、道徳の発達も具体生活の実行の内に初発し、内包されること、幹も、枝も花も実も、芽の内にあると、いえばいえるのと同一の理になるのである。

幼児の道徳教育の最初をしつけ、すなわち実行生活の教育におくのは、何人も此の理に基くからである。この具体の実行的道徳教育を重ずることなき修身教育は、芽を守らずして、有終の美を得んとする園芸家と誤りを同じうするものである。

しかもまた思わなければならぬことは、実行的道徳生活は、日常の実際として、時に外部行動、外形の整美が主になつて、――時として、それだけであつて、――必ずしも、内部の生命が伴わぬことのあることである。その場合でも、道徳教育の方法としては効果がある。軽視すべきではない。しかし、その生活の道徳価値は多いといえない。道徳生活は特に内部性を重要とするからである。すなわちしつけとしてこの道徳的習慣は美しいことであり、それはそれとしての価値をもつけれども、道徳教育としては、それだけでは、浅くまた弱いことを忘れてはならない。――幼児には余り多くを求めることは出来ないし、深過ぎ強過ぎることを期待してはならないが、また、幼児だからといつて、道徳生活の価値のありかを小さいところに置き過ぎてもならない。

単純なる習慣的道徳行動をねらう機械的乃至他動的しつけにだけ満足せず、もう少し、（その度合は一般的にもむつかしく、殊に、幼児個々の差異によつて最もむづかしい）内部に達する、おとなの視力と感受性とが必要である。

道徳観念の教育は此の後である。殊に道徳概念の教育はずつと後のことである。此の心理的理由を知らぬ人はない筈であるけれども、観念や概念が、実行（前述）とは又別の意味で、外部的性質を帯びていることが、おとなの道徳が観念的や概念的のところが多いのに通じ易いのと、一般的にいつて、おとなの教育的焦慮癖とから、感情――道徳生活のエッセンスであるところの――の点に伴わない、観念道徳や甚だしきは、概念道徳にだまされ易い（幼児の道徳として）ことになるのである。修身の格言を幼児に覚えさせたり、倫理の方則を幼児に分らうせようとしたりする過誤失態を敢てせられたりするのである。――此の論、詳かならざること甚しい。しかし、今日の要を得るにおいて敢て簡明を失つていないと確信する。